

メールレター(47)

師走

雪が降り、時は静かに過ぎていきます。師走となりました。クリスマスイルミネーションが何事もなかったかのように街並みを飾り、きらきら輝いています。我が家も、聖誕の囃(クレーシュ)の人形をいつものように飾りました。カトリックで育ったドリトル先生は、これがないと年末年始がやってきません。あれあれ、どうやら、手の先が欠けてポロツと落ちてしまっている人形が約二つあります。明日はこの修理をすることになりそうです。今年はクリスマスツリーはやめ、大きな真っ赤なポインセチアの周りを少し飾り立て、クリスマスの雰囲気を出してみました。

「ねえ、ちょっとこのワイン飲んでみない？ 自然発酵のサンテミリオン(ボルドー地方の赤ワイン)なんだけど。パイオのワインでどんな風味なんだろうね。」

ドリトル先生が赤ワインのボトルをだしてきました。

「興味深々。ポンと栓を抜いてちょうだい。洒落たグラスを出すことにしましょう。」
アルコールから遠ざかっていたマダム田中もドリトル先生も久しぶりにグラスを傾け、味わってみることにしました。

「色は深紅色、まさにボルドーだけど、渋みがなく、ちょっと甘いかも。」

「もう一つ何か感想はない？」

「産地独特の味があると書いてあるけど、どこか泥くさいような素朴さがあると思うわ。自然な風味なのかしら。喉越しは良いわね。」

「そうだね。」

ワインと豚のスネ肉の煮込みで、ドリトル先生にはすっかりフランス気分の夕べとなりました。

先週の日曜日のことでした。

「パパ、ピアノ(大きな電子ピアノ)これから持っていくから。」
義理の長男が12年ぶりに貸してあったピアノを返しにきました。

「小さなグランドピアノを買ったんだ。」

気分転換に毎晩ピアノを弾いていた義理の長男にはこだわりがあって、自分の好きな音の出るピアノをそばにおいておくのが夢だったようです。グランドピアノの音は余韻があって優しく響きます。ドリトル先生は帰ってきたピアノに大喜び。

「退屈しのぎに、これで指を鍛えて少しエチュードでも弾いてみるよ。」

とはいうものの、ピアノのレッスンは大きなバラの花束を先生に送り、3ヶ月間で放り出して以来、きちんと弾いたことはなく、もっぱらプログラムされている曲をスイッチを入れて聞くだけだったので、恐らくこのまま、ピアノは家の一角を飾るだけになりそうです。子供たちが家に集まっていた頃は、イケメンの次男に(長男もイケメンですが)このピアノでジャズを弾いてもらい、ドリトル先生にウイスキーを入れてもらい、料理をする、これがマダム田中の小さな幸せだったのですが、遠い昔の思い出になってしまいました。

「仕事はどうなんだい。」

金融界で働く長男がこのコロナの不況をどう切り抜けていくのか、ドリトル先生は日頃から心配していました。

「金融界って、不況でも好景気でも儲かるようになっているんだ。仕事は厳しいけれど、顧客は、不況なら株を売り、好景気なら買う、いずれにしる、金は動き、銀行は儲かるようになっているんだ。その中でリスク計算が僕の仕事だから。」

自分の手で稼ぎ出したお金で暮らしてきたドリトル先生には、バーチャルな金銭の動きは理解しがたく、いささか煙に巻かれた感じで、心配はさらにつのるようでした。

少しお腹が出てきた長男の嫁(来年4月出産予定)は、重いピアノを運ぶのを何の苦もなく手伝っています。

「無理しないで、体を大事にしないと。」

と言っても、マダム田中はこの重いピアノに歯が立つ訳はなく、押しつぶされるのが関の山なのです。

「大丈夫、大丈夫、今朝も息子とテニスをしてきたから。まだ、息子には勝てるし。多少、走る量は少なくしているけど、8ヶ月頃までテニスは続けていくから。」

テニスで鍛え上げた体には出産も大した問題ではなさそうです。極めて自然体。お嫁さんは、育児休暇は出産を挟み1年間とるようです。この間、70%程度のお給料は支給されるようなので、経済的にも安心して育児にあたれるようです。娘は、仕事に正式についてからまだ間もないため、半年ほどの育児休暇になるようですが、娘の夫も2ヶ月ほど育児休暇がとれそうですから、2人でなんとかやりくりがつくようです。

ただ、娘の2月末の出産は、コロナ禍で、事によると1人で入院、出産、退院ということもありそうです。夫すら、付き添いも出産立会いも面会もできないという事態も考えられるようです

「僕なら、ドアをぶち破って部屋に入る。」

とドリトル先生は、拳を握って今から構えております。一体どうなることやら。年末年始、マダム田中の頭の中は忙しくなりそうです。

良いお年をお迎えください。